

日産エンジニアリング新聞 1月29日(火)

第19595号

記事 電話03-3433-7161 mail-ed@decn.co.jp 購読 電話03-3433-7152 mail-sa@decn.co.jp 広告 電話03-3433-7154 ei-ryo@decn.co.jp
発行所 日刊建設工業新聞社 〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 電話03(3433)7151 https://www.decn.co.jp/ ©日刊建設工業新聞社 2019

治水事業とは国家百年の計で着実にコツコツ進めていくものである。しかし時として「ダムは環境破壊だ」「ダムはムダだから造るな!」「脱ダム宣言」などとマスコミが面白おかしく喧嘩(けんそく)を作り上げる。

脱ダムとは、「アースダムは堤体背面に草が生えるから環境破壊で無いのでよい」「コンクリートダムはダメ」というものであり、論理破綻している。

ダムが堤防か、ダムによらない治水が求められるというが、ダムと堤防とは全く別のものであり、二者択一ではない。両方とも必要で重要なのである。堤防は洪水調整機能がない。流水の正常な機能の維持・河川維持用水・不特定用水の補給はできない。

明治維新150年と治水の歴史

竹林 征三

〈46〉混迷の治水・ダムと堤防・原点回帰を

り、地域連合を結成して担、当時の国土交通相は「予断をもちに検証するの長を務めて順番で代表となる、といった構想も出されてはいる。そもそも府県知事では2府県にまたがる利害が対立する案件の判断は無理なのである。

コストベネフィット(費用便益)分析が小さいものは中止しろ、とも言われる。コストは事業費そのもので、必要経費だから積み上げれば出てくる。便益は計算できてない。人命は何よりも大切と言いが、人命の評価とは? 情報化の進んだ現在、高度情報化された都市の機能まひによる損失ははかり知れない。治水の便益は極めて大きい。

住民の意見を聞くことと、住民の意見に従い事業を行うのは全く別だ。多くの住民は河川について詳しくない。治水はそれほど簡単ではない。治水に知恵を出し苦労してきた先人の意見は聞かなくてもよいのか。河川は経験工学である。先人の苦労を聞かなければ貴重な経験が途絶えることになる。

八ツ場ダム建設の是非が大きく取り沙汰されていた。環境破壊につながる。出口が詰まれば貯水位は急上昇するので、上流の氾濫や地滑りに対する警報も

しななければならない。過去に幾度も洪水時に巨大な量の流木などの流下物が河川の橋脚や水路の呑み口に貯まり、流路を閉塞して堤防破壊や大氾濫に至った悲惨な歴史がよみがえる。結局、流水ダムの機能を保持するために徹底した流木対策を行った上で、維持管理(貯水池斜面のごみ除去などを頻繁に行わなければならなくなる。つまり、流水ダムは案外高くつくことを忘れてはならない。また、試験湛水ができにくい構造なので不安が残る。

CSG工法は、ばらつきが多い低品質の現地発生材を用いた日本発の優れた技術である。しかしCSGをダム本体へ適用する場合、安全性を確保するためである程度の強度が必要となり、低品質材料を大量に処理する高度な施工技術が必要となる。ダム高が高くなるほどこれは顕著で、施工者の負担は大きい。経済性への疑問も残る。景観上も、プレキャストによる外面のズレ、雨水・漏水のシミ、茶色のにじみなど、美しいとは言えない。結局、まだまだ改良点は多いように見えるが、質を高めると同時に経済性を損なうことになる。

治水の混迷が深まれば、原点に立ち、将来の長期的展望のもとに考えることが肝要である。この連載が役に立てば幸甚である。

参考文獻・『物語日本の治水史』鹿島出版会(常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会長) 〆〆〆